



実習はまだ続く

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

● 2002年2月

分娩室で3週間の実習中のある金曜日、メントーのメリーとダブルシフトをしたときのこと。病欠続きでその日の午後の体制は助産婦7人のはずが4人となってしまった。産褥室から応援を頼もうにも、ここも人数不足だった。産科外来や妊娠期に不安があったら予約なしでも立ち寄れる助産婦外来が閉まるためか「金曜日の午後は変な妊婦さんが多いから」とメリーは心配そう。その言葉が的中して、その後、ひどい腹痛を訴えて救急車で運ばれてきた20週の妊婦さんや、胎動を感じなくなって入院してきた41週目の妊婦さんなど、ハイリスクの人が続いた。周りがばたばたしているそんな中でも、まだ私は正常産に集中すべき2年生なので、正常分娩を介助していた。

そして次は、産科棟入院室での2週間の実習である。去年の夏休み明けの実習に続き、帝王切開後の入院がほとんどの産褥室に配置になった。ちょうど産後検診実技試験に落ちた直後で、大学の講師と何が不足しているのか、何に焦点を当てて追試に備えるべきかと話し合った上での実習だったので、スタッフにも病棟にも慣れずに不満足のまま終わった前回の実習と比べて、格段に有意義に過ごせた。

2週間同じ助産婦にメンターになってもらうことは、シフトの関係で難しく、やはり毎回違う助産婦と働くことになった。それでも

毎日の検診、新生児チェック、お母さんとの会話のなかでのアドバイスや母乳指導と、前回の実習では助産婦に付いて見ていることがほとんどで、自信がなかったことが、今回の実習期間に場数を踏んで、産後のいろんな変化に振り回されているお母さんとも1対1で向き合えるようになった。自分で答えられないことや不確かなことがあったら、いつでも助産婦に助言を求められるから、心強い。

これだけ慣れたつもりでも、産後検診実技試験の追試では緊張も加わって言葉が出てなくなるし、ぎりぎりの合格だった。これから先プレゼンテーション、口頭試験、産前学級と、話をする機会が増える。「緊張しているのが見えたり、言葉を探しているようではだめだから、人前で話すことに今のうちに慣れるように努力しなさい」と、私の一番苦手なところを試験官たちに突かれた。

実技試験はこれが最初で最後になるが、この試験方式は「評価されている意識の下では普段やっているようにできない」と学生に不評だった。実技は随時、メントーが項目ごとに目的レベルに達しているかチェックするし、実習中の学生のことは、大学講師よりもメントーのほうがよく知っているはず、というのが学生の意見である。

この実習を最後に、助産の基礎・正常を扱ったコースの前半は終わり、3月からの後半18か月では、異常を扱う授業も始まる。